事例報告

生物多様性保全に取り組む農業者との連携

特定非営利活動法人オリザネット　事務局長　古谷　愛子 氏

NPOオリザネットの事務局長をしております古谷と申します。よろしくお願いします。「生物多様性保全に取り組む農業者との連携」というテーマでお話しさせていただきます。

一般的に経済連携といいますと、たとえば今回のテーマである生物多様性を保全する農業者、消費者やNPO、企業、団体等、そうした人たちが農業者が生産したものを購入する、生産したものを売るとか、そういった部分が今まで注目されてきていると思います。

生物多様性に配慮した農産物といいますと、たとえばいろんな認証制度がありますけれども、農産物が生産されているほ場内での生物多様性の取り組みに重点が置かれています。ただ農村地域で生物多様性にまつわるいろいろな課題というのは、ほ場の中だけではないのです。

どうやって生産された農産物かというものだけではとらえきれない生物多様性の取り組みというのがあると思うので、生物多様性保全に取り組んでいる地域や、農業者の農産物を選択するという視点も必要かなと思います。

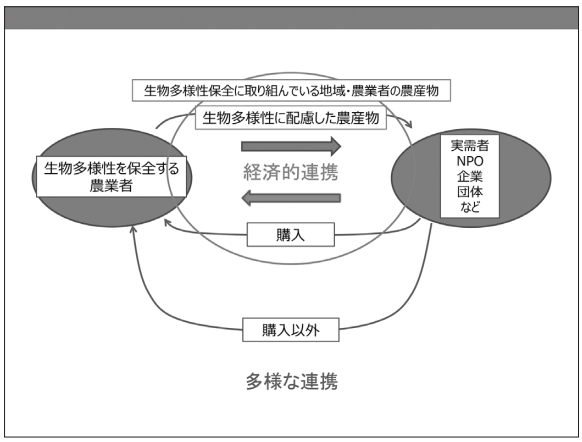
たとえばこうした生物多様性にさまざまな取り組みをしている農業者は、農産物のつくり方は普通のつくり方であっても、たとえば農業水路で魚がすめるような工夫をしている農業者とか、農業者の家の屋敷林を保全しているとか、地域の雑木林を保全している等、そういった取り組みをしている農業者はたくさんいますから、そういった生物多様性の取り組みをしている農業者の農産物を選択するというのもひとつ、選択の視点に追加する必要があるかなと思います。

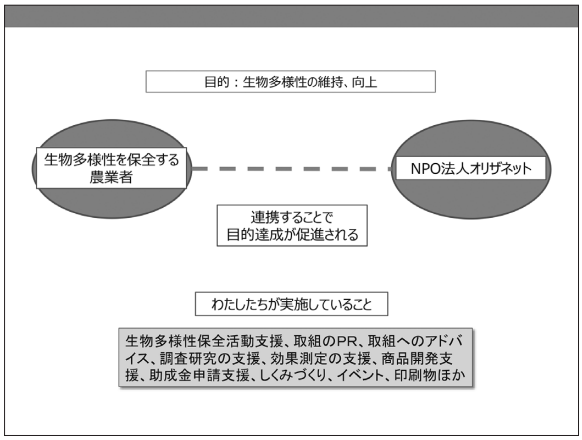
そして購入とか選択以外の部分でもさまざまな連携が考えられるかと思います。

私たちNPO法人オリザネットは環境NPOです。農村地域の生物多様性を向上させるための活動をさまざま行っております。その活動の中でもいろんな主体と連携しておりますが、最も重要な連携の相手というのが農業者です。生物多様性を保全している農業者との連携を重視しております。

連携をしている目的ですが、やはり連携をすることで共通の目的、農業者としても地域の生物多様性の維持向上を進めている、私たちもそれを目指しているということで、連携することで共通の目的達成が促進されるという視点です。

私たちが実践していることは、たとえば生物多様性保全活動の支援や取り組みのPR、取り組みへのアドバイス、調査研究の支援、効果測定の支援、商品開発支援、助成金の申請支援、仕組みづくり、





出所：登壇者講演資料

それから、イベントや印刷物の制作等々いろいろあります。

たとえばこれは具体的な写真でお話をしたいのですが、ほ場以外での生物多様性の取り組みにも非常にたくさんあります。これはメダカとか、いろんな両生類なんかがたくさんすんでいる素掘りの水路の泥あげ作業の写真です。どこでもそうですが、こういった素掘りの水路は生物多様性には非常に貢献しているのだけれども、維持管理が大変です。ですので私たちみたいなNPO、それから、地域の人たちが生物多様性のためにこういった部分を直接支援するというのが重要だと思います。ここは埼玉県さいたま市の農家ですが、20年ぐらい前から農業体験の受け入れ活動をしていましたが、生物多様性に関する活動はしていませんでした。私たちが一緒に連携するようになって、こういった取り組みも農業体験の中の一部に入れてみたら良いのではないですかとお話ししたのです。最初は私たちが中心になって一緒にやったのですけれども、今では農業者自身の農業体験プログラムにこういった生き物を育む水路の泥さらいなんかも位置づけて、学校や企業の方々が一緒に作業をしています。

出所：登壇者講演資料

それから、生き物調査の支援の活動等もしております。特に農村地域の生き物調査は、10年前から始まった多面的機能支払交付金の活動で非常にたくさんの農村地域の農家の方たちが取り組みを始めています。特に栃木県ですと、300以上ある多面的機能支払の活動組織が、年2回生き物調査を地域でするというのが当初から義務づけられているのです。数年前から義務ではなくなりましたが、ほとんどの活動組織は継続しています。私たちNPOではそういったところでの生き物調査の進め方とか、道具とか、生き物の同定とか、そういったもののアドバイスをずっとやっています。生き物調査というのは、地域の人たちも、農業者も、調査を通して地域の生物多様性を育んでいる農業をみんなで大事にしていこうねという意識の向上につながる取り組みなので、非常に良い取り組みです。

これは埼玉県越谷市の事例ですが、去年から生き物調査をはじめたところ、こんなにも地域の生き物が田んぼという場所に生きているのだというのを農業者も改めて実感し、地域の子供たちや非農家の方たちも実感できたようでした。今後は生き物調査にプラスして、ホタルを復活させたらどうかとか、たとえば素掘りの水路があるので、地域の大学生に協力してもらって、水路の泥上げ作業等の管理活動もみんなでできないだろうかという話し合いを進めています。

出所：登壇者講演資料

これは栃木県の中山間地の茂木ですが、棚田百選に選定されている場所です。ここは10年以上、棚田のオーナー制度をやっています。オーナー制度は学校が関わったり、企業が関わったり、一般

市民が関わったりしているのですが、ここでの取り組みのポイントというのは、田植えや稲刈りのイベントだけではなくて、畦畔の草刈りまでしっかりオーナーにやってもらおうというのが農家側のこだわりで、お客様扱いしないで、一緒に中山間地の水田を守っていこうという意識で取り組まれているのです。おととし相談があって、せっかくこういう環境が良いところに棚田のオーナーが来てくれているのに、生き物調査の活動も今までやったことがないので、どうやったら良いのだろうかということでした。そこで、農作業のあとに生き物調査の会をやりました。その後、お話をいろいろ伺っていると、ハッチョウトンボという日本で一番小さいトンボの生息地が棚田のここの部分、一番上の休耕地に生息地があるのですが、乾燥が進んで湿地状態になっているところがどんどん少なくなってハッチョウトンボがすめなくなっているというお話でした。この写真の中のおじいちゃんの後ろ姿が真ん中にあるのですけれども、この方がひとりで生息地を保全しているとのことでした。それだったら、民間の助成金を活用して保全再生を参加者に協力してもらってやったらどうだろうかということになり、実際、今年、みんなでスコップで掘り起こして湿地の再生に取り組みました。来年どれだけ増えているか、オーナーもみんな楽しみにしてくれていると思います。

出所：登壇者講演資料

それから、取り組みへのアドバイスもしております。オリザネットでは、こうやったら生物多様性が向上しますよといろんな事例をいろんなところで報告させてもらっています。これは山形の庄内平野の三川町の夏水田んぼです。冬の田んぼに水を張る冬水田んぼの取り組みは有名ですけれども、麦やナタネの栽培したあとに、稲を植えないで夏場水を張るのが夏水田んぼです。それは連作障害を防ぐという目的があって、そうすることで水生昆虫が豊かになったり、夏の渡り鳥の生息地になるのです。農業と生物多様性についての全国集会でその話をしたときに、山形の農家の方があとで連絡をくれて、うちのところでもぜひそういった取り組みをしてみたいのでという相談があったのです。すぐ私も山形まで行きまして、この地域でできるだろうかと、いろいろ検討をして、ではやってみよう、早速その年から取り組みが進みました。

2010年に始まったのですけれども、実際すごいいろんな生き物がいて、農家の方は非常に喜んでくれたのです。この取り組みはとても良い取り組みなので、地域にも広げて、どうしたら継続できるのかいろいろ検討してくれたのです。日本型直接支払制度の中に環境保全型農業直接支払交付金という制度がありますが、町や県と連携をして、この取り組みが山形県の地域特認の補助事業対象になったのです。これは農家の方が一生懸命に取り組んでくれた非常に大きな成果だと思います。私たちは調査報告書のつくり方とか、生き物同定等も協力してやっているのですが、これもNPOと農家の連携の事例です。

それから、これも多面的機能支払の活動組織ですが、やはり生き物調査や生き物への取り組みを進めていくと、より地域の環境を向上するためにどうしたら良いのだろうかといろんな取り組みをする農業者というのが増えてくるのです。ここの地域でも、生き物が増えるような水路の工夫をしたり、夏水田んぼ、冬水田んぼ、とにかくいろんな環境、生物多様性の取り組みをしてくれているのです。どうしたらより生き物が増えるのだろうかという研究もしており、そのお手伝いなんかもしています。

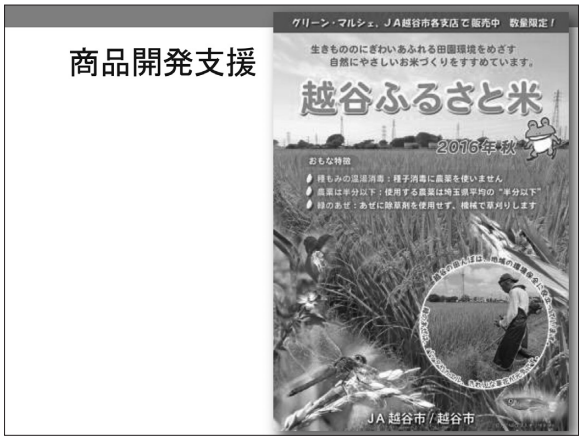
それから、これは有機農家ですが、有機農産物というとなんとなく生物多様性にもやさしいイメージがありますが、たとえばお米のつくり方だと、アイガモ農法も有機栽培ですね。でもアイガモ農法というのはいろんな生き物をアイガモは食べ

てしまうので、生物多様性の視点ではあまり良くなくて、むしろ環境負荷の低減の視点から重要な取り組みだと思います。

この有機農家の人たちも、自分たちの有機農業は、環境負荷の低減や人間の安心・安全だけではなく、生物多様性の貢献の部分をもっと取り組んでPRしていきたいという若手のグループです。この写真は夏場、田んぼの中ですくい取りをして、そのすくい取りをした虫を調べています。カメムシ等の害虫はいるのですけれども、有機農業をすると、それ以外のトンボとか、ハチ類、そういった天敵になるようなものがいっぱい出るので、そういったものをきちんと自分たちで認識していきましょうという、そういった支援もしております。

それから、商品開発ですが、これは埼玉県越谷です。都市近郊の越谷市は人口が33万人もいます。その越谷市のJAの組合長から、これからのJAは、やはり地域の環境への貢献の部分をもう少し取り組んで地域の人に理解してもらえるようにしていかなくてはいけないと思うので、何かできないだろうかという相談をいただきました。そして越谷市の環境政策課、農業振興課、オリザネット、JAと一緒にこういったような取り組みをしています。

農薬を半分ぐらいにして、あぜに除草剤を使わずに機械で草刈りをしますという項目を追加しました。あぜに除草剤を使うか使わないかというのは、人間の安全にはあまり関係ない部分ですが、地域の環境保全、生物の多様性には非常に効果が大きいのです。なのでそういった視点を取り入れた商品をつくって、むしろ農産物に直結しないような取り組みをしている商品をPRしていくことで、地域の農業の価値を伝えていく素材にしたいという思いです。



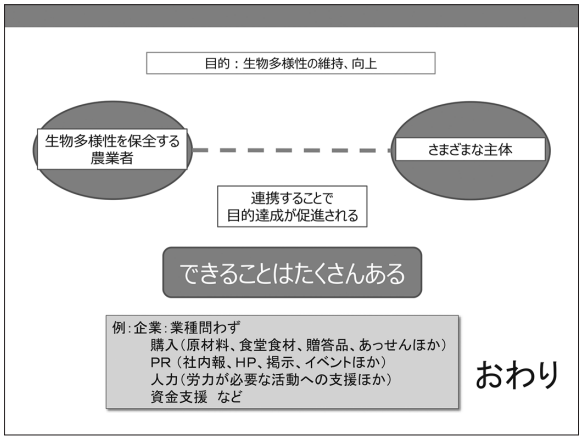
出所：登壇者講演資料

これは1kgあたり50円上乗せしています。最初はどれだけ買ってくれる人がいるかなという感じだったのですけれども、去年1年実験してみて、JAの直売所の売り子さんから、お客さんにきちんと説明すると、多くの人が選んでくれるんだよ、意外でしたとのことでした。商品は完売したそうです。こういった取り組みもしています。

生物多様性を保全する農業者と、さまざまな主体が、生物多様性の維持向上を目的として連携することで、生物多様性の維持向上が促進されるのだと思います。そのためにできることは結構たくさんあると思います。たとえば企業の方で業種を問わずだと思うのですが、製品の原材料にする、社員食堂で利用する、贈答品に使ったり社員に斡旋したりする。それから社内報やホームページ、掲示板、イベント等、いろんなところで農業者の取り組みをPRする。それから、労働力が必要な活動への支援、人力への支援をやっていただくとか、あとは資金支援、まさに環境保護団体と同じような活動を、本当にたくさんの農村地帯の農業者が取り組んでくれています。雑木林の保全とか、水路の生物多様性の取り組みとか、冬水田んぼや

夏水田んぼ、商品に直結しないようなことでも非常にたくさんの取り組みが進められていますので、そういったものに助成金等で直接支援をしてくれるところがあったら良いなと思っております。

以上です。ありがとうございました。



出所：登壇者講演資料